山田博雄『考古小録』にみる摂津加茂遺跡の踏査

青木政幸
公益財団法人辰馬考古資料館　学芸員

１　はじめに

辰馬考古資料館が所蔵する資料の大半は、設立者である白鷹３代目、辰馬悦蔵とその祖父である初代辰馬悦叟の収集によるものである。コレクションの成り立ちは単に資料購入によるものだけでなく、同好の方々からの寄贈による点も大きい。辰馬悦蔵は本業の傍ら考古学の調査研究を続けており、活動の場には西宮史談会といった郷土史のあつまりがあった。そこで培われた人間関係がコレクションの形成にもかかわってきたのである。

そのひとつが、今回取り上げる山田博雄氏による収集資料および関連資料である。資料の大半は阪神地域で山田氏が実際に採集した土器や石器であり、当館近隣の遺跡からの資料として展観に活用されている。ただこれら資料が高く評価される最大の理由は、山田氏が遺した資料についての記録『考古小録』にある（写真１）。踏査の場所、日付、同行者がきちんと記録されているだけでなく、描かれた資料のスケッチは、現資料との照合にも十分なほどである（図１～３、写真２）。

本稿は山田氏が記録したこの『考古小録』をもとに、氏がどのような活動を行ってきたのかをたどった上で、加茂遺跡に関わる好事家の活動を再検討することで発掘調査による遺跡の理解が大きく進む前時代の状況をいま一度検証し、学史的に位置づけたい。

２　山田博雄と『考古小録』

『考古小録』の概要

今回検証する『考古小録』は、山田氏による阪神地域の踏査記録であり、A5サイズの大学ノート７冊にまとめられている。それぞれにNo.1からNo.7まで通し番号が振られており、No.2のみ『石器採取小考』と見出しを変えている。辰馬考古資料館に寄贈された、その他の自筆記録を含む資料一覧を表１にまとめた。拓本集等の記録については後述する。

見出しである『考古小録』の由来については、西宮史談会の中心人物でもあった田岡香逸氏の回想が、当館が刊行した『山田博雄氏収集資料目録』の序言に寄せられている（財団法人辰馬考古資料館1987）。これに拠れば、田岡氏より聞いた紅野芳雄氏の記録の整理の手法に倣い記録をつけ始めたようである。見出しについても紅野氏の記録集と同じ『考古小録』としているが、一度『石器採取小考』に変更したのは多少なりとも遠慮があったのではないか。

山田氏の基本的な記録の手法は、日誌風の記述に日付、行動、採取資料の概要を記録することである。適宜略図や資料のスケッチを補い、ときには利用した交通の切符半券や訪問先のリーフレットを貼り付けている。また日時は当初手書きであったが、その後にスタンプで処理するようになる[1)]。注文の経緯なども『考古小録』には記されており[2)]、几帳面な氏の人柄がうかがえる。

このようなきっかけで記録が始まっているが、No.1の出だしの記載は昭和12年10月13日からである[3)]。山田氏が大阪第二飛行場建設事務所勤務の辞令を受け、現地へ出勤した初日の日付とみられる。

表１　山田氏による調査記録一覧

資料名	号数等	備考	種類
『考古小録』	No. 1	S12.10.13～S15.12.1	自著
	No. 2	S15.12.8～S16.5.6	自著
	No. 3	S16.5.7～S17.2.28	自著
	No. 4	S17.3.1～S18.2.20	自著
	No. 5	S18.2.21～S19.2.11	自著
	No. 6	S19.2.11～S25.10.19	自著
	No. 7	S26.1.2～S35.2.28	自著
伊丹飛行場銅鐸出土関係地図	一式		地図等
高松塚古墳壁画報道関係	一式		新聞切抜
明石原人・象発見記事	一式		新聞切抜
各所取得の布目瓦破片古瓦破片拓本集	一綴		資料整理
軽部慈恩『百済美術』緒言	一綴		筆写青焼
朝鮮渡海日記	一綴		筆写青焼
朝鮮渡海日記	一綴	津和野高校『石斧』付	筆写青焼
朝鮮渡海日記	一綴		筆写
南紀白浜熊野潮岬回遊記	一綴	S35.5.23～5.24	見学記録
西宮文化協会旅行のしおり	一綴	S36.7.16～S40.4.18	見学記録
佛像彫刻の鑑賞について	一冊	川勝政太郎氏の講座メモ	自著
梵字入門	一冊	S61.6.27～7.8	自著
梵字の研究	一冊	1986.6.9～1.15	自著
みちのくを旅して	一綴	S44.6.17～21　青焼	見学記録
みちのくを旅して	一綴	上記原本	見学記録
私のコレクション　考古資料	一綴	弥生土器の拓本	資料整理
辰馬考古資料館新聞切抜	一綴	1976年以降の資料館関連	新聞切抜
法隆寺抄	一綴	昭和24年	新聞切抜

この出だしの記載は以後の多くの記述とは様相を異にし、整理された長文の文章で遺跡の概要と飛行場採取資料の詳細を記載している。記録を書き始めるにあたり、そのきっかけとなった遺跡・資料について遡ってまとめたものと思われる。実際の時系列にそった事実報告主体の記述となるのは14年４月後半以降とみられ、その間は14年４月に開催された西宮史談会主催郷土資料遺物展覧会に関するものが散見する程度である。

この記載内容の違いについて、考古資料からも確認してみる。加茂遺跡で採取された土器の注記から日付を探ると「13.10.5」の記載が１点確認されている（写真３）。状況的に昭和13年を示し、第二飛行場勤務以後の採取であるとみて間違いはない。山田資料全体の土器の注記を確認しても14年以前はなく、14年の日付に限っても「14.2.11」（写真４）・「14.6.11」（加茂）「14.3.1」（石橋）、「14.4.13」（西宮久之川谷）、「14.7.5」（大飛）、「14.10.18」（国府）だけであった。

以上の点から、山田氏は昭和12年職場異動をきっかけに本格的資料の採取を始めたこと、翌13年のどこかの段階で田岡氏との面識を得て西宮史談会の活動にも参加するようになったこと、史談会で阪神間の遺跡に関する情報を得たことにより13年秋以降、遺跡の踏査時期を開始したこと、とする想定で間違いはないだろう。そして昭和14年、準備を手伝っていたと思われる西宮史談会主催郷土資料遺物展覧会の開催を一つの区切りとし、それまでの記録を整理し、併せて以後の活動を日誌

写真１　山田博雄氏『考古小録』

的に記録していくことになったと思われる。

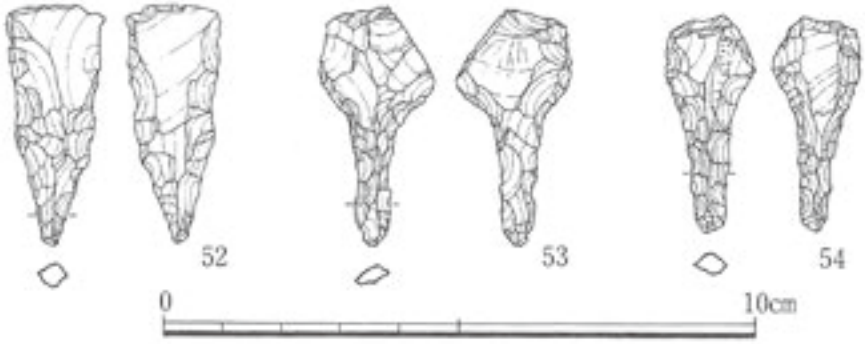
『考古小録』から追う山田氏の活動

この『考古小録』の記載内容について、踏査先・同行者等を整理したものが表２である。季節（３ヶ月）ごとに簡略化したため、同日に訪れた遺跡と同月別日に訪れた遺跡が混在しているが、大枠では後述していく山田氏の踏査の実態を反映している。

年代的な特徴としては、踏査の記載は昭和18年までが主であり、以降の記載は少なくなることが挙げられる。時期的な状況を考えれば当然のことであるが、とくに17年４月18日空襲の記載が初めて記されると、これを境に踏査に関する記事は減少していく。したがって14年から18年までの５年を中心に山田氏の活動をたどることにする。

記録の始まる14年当初は、摂津地域の限られた遺跡に集中する。必ずしも知名度の高い遺跡を訪ねている訳ではないが、『考古小録』に挙げられた踏査地を網羅している先行記録がある。見出しの由来となった紅野芳雄氏の『考古小録』である。仁川・武庫之荘などは紅野氏の踏査によって資料散布地の地点が増えており、後者に至っては昭和10年に新しく見つけた遺跡地である。紅野氏の『考古小録』の出版が15年であることを考えると、書籍からというよりは西宮史談会や田岡氏を通していち早く情報を入手していたと考えられる。またこの年は山田氏が仕事の合間に行動していることが多いためか、同行者も少ない。家族が同行するケースは近隣の遺跡に留まり、休日に周辺の寺社と併せた散策がわずかにあるだけである。ただその翌年となる15年には、非常に数多くの踏査に出かけており、家族と出かけることも増えるようになる。また、同好の仲間と大阪・奈良方面に出かける回数も増えると、家族とも踏査先を次第に遠方へ足を伸ばすようになる。同好の仲間と家

図１　石錐のスケッチ



第７図　加茂遺跡 石器類(2)

図２　スケッチに該当する石錐（53、辰馬考古資料館1988）

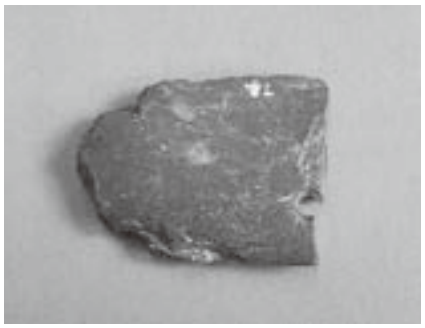


写真２　スケッチに該当する石包丁

図３　14年６月29日採集の石包丁

写真３　注記「13.10.５」

図４　家族採集の資料

写真４　注記「14.２.11」

族とともに出かけることも多くなり、16年の秋以降は単独で出かけることは稀となる。考古学に夢中になっていく経緯が記載にも現れている。

18年には近場よりも河内・大和方面への踏査が主になり、19年以降は前述の通り記載数が減少する。この点については後述するが、戦後になるとさらに記載数は減り、遠出をした際の備忘録が散発的に記されるだけである。

好事家の個人史としての『考古小録』

この周囲を巻き込んだ活動の広がりを『考古小録』の記述を拾うことで、もう少し細かくたどってみる。大阪空港や加茂遺跡以外の踏査先の情報が出てくるのは14年の夏である。７月31日付で恩智遺跡の新聞紹介記事を取り上げており、９月27日には越水山の概要をまとめた記載がなされる。翌年９月14日には西宮史談会で大和川（瓜破）関連の発表を聴講しており、同好者からの情報・新聞記載の情報によっても踏査先を増やしていく過程がうかがえる。また15年夏以降には踏査先で出会った同好の方々の氏名が記載されるようになってくる。それまでは西宮史談会（ほぼ田岡氏）・宮川石器館関連の方々のみであった。田岡氏を通じて、のちに当館の初代館長となる高井悌三郎氏や京都大学の梅原末治氏や小林行雄氏とも知り合うようになり、自身の採集資料を小林氏に見てもらうこともあった（18年10月２～３日記載内容など）[4]。

また同行者としての家族に注目すると、興味深い記載が散見される。子ども自身が採集した資料をスケッチし、その旨を付記している点である（図４）[5]。さらに戦後になると、自身の子どもだけでなくその友人を連れて踏査に出かけており、行き先も近隣ではなく河内方面かつ、二上山など史跡見学的要素が強くなり、資料採集を主目的としていない氏の心情が読み取れる。

記載の減少する19年以降についても触れておく。

号数を変えるNo.6以降、踏査の記載ではなく、これまでに採集した資料の整理記録や西宮史談会が開催した講演会についての記載が増える。時代的な制約から踏査に出かけられないのは当然であり[6]、参加できなかったことの記述ではあっても田岡氏らの尽力をたたえるかのように詳細を記載している。戦後の記載は昭和20年代が大半をしめ、記述内容から23年までの部分と25年下半期から29年頃までの部分とに分けることができる。前者はほとんどが新聞・雑誌の考古学関係記事の抜き書きである。踏査を再開した23年以降となる後者では、先述のように多くの子どもたちを同行させていることが増えている。

この間の記載として留意したいのは、同好の仲間から資料を譲り受けた記載（26年１月２日ほか）と、加茂遺跡周辺の環境変化に関する指摘（25年１月７日、28年11月３日）である。前者は高齢のため資料譲渡を考えるようになった方の心情を慮り、後者では道路の拡幅、河川の改修、駅名変更などを記すとともに、これまでのような採集活動ができなくなることを見通している。『考古小録』の記録は途切れがちとなるが、山田氏の意欲が薄まったわけではない。その点については、『考古小録』以外の資料も交えて検討するとして、このように『考古小録』を同行者そしてその踏査先を重ねて見直してみると、単なる踏査記録ではなく山田氏の個人史としての側面も浮かび上がってくる。家族の成長や同好の先達への思いなど織り交ぜながら続けてきた活動記録は、古い時代の好事家としての活動とともに終わることになったと思われる。

表２　『考古小録』からたどる

日付			同行者	踏査先（財団法人辰馬考古資料館1988	
西暦／元号（昭和）				摂津	
				阪神間	北摂方面
1939	14	冬		空港	
		春	単独	加茂	
			同好	加茂	宮之前
		夏	単独	加茂（４）・武庫之荘（２）	石橋（４）
			家族	加茂・満願寺	
		秋	単独	越水（２）・加茂（２）・保久良（２）・武庫之荘	
			家族	越水	
			同好		
		冬	単独	小林・加茂（３）・越水（３）・仁川（２）・武庫之荘	箕面
			家族	加茂・越水・武庫之荘	石橋・箕面
1940	15		同好	空港ヵ	石橋・箕面
		春	単独	小林・加茂（４）・越水（３）・逆瀬川・武庫之荘	箕面
			家族	越水（６）	
		夏	単独	加茂（４）・越水	
			家族	加茂（２）・越水（２）・武庫之荘	
		秋	単独	加茂（３）・越水（２）	石橋
			家族	加茂（２）・越水・仁川	箕面
		冬	単独	加茂・出屋敷・武庫之荘	
1941	16		家族	越水（２）・仁川	
		春	単独	加茂（５）・空港（３）・越水（２）・武庫之荘	石橋
			家族	空港（２）	
			家族・同好	空港（２）	
		夏	単独	加茂（５）	
			家族	越水	
		秋	単独	加茂	
			家族	加茂	
		冬	単独	加茂・武庫之荘	
1942	17		家族	加茂	
		春	単独	加茂	
			家族	加茂（２）・越水	
			家族・同好	大歳山	
		夏	家族	加茂	
		秋	単独	空港	
			家族	加茂	
			家族・同好		
		冬	単独	加茂	
1943	18		家族	甲山裏・加茂（３）	
			同好		
		春	単独		
			家族	甲山裏・加茂・仁川	
			家族・同好		
		夏	単独	保久良	
			家族		
		秋	家族	加茂（２）	安満
			同好	保久良（２）	
		冬	単独		
			家族	加茂	石橋
1944	19		同好		
		春	単独	加茂	
		夏	家族	加茂	
		秋	同好		

山田氏の踏査先

『山田博雄氏収集資料目録』記載地）			その他
和泉	河内	大和	
	国府・長持山		
	国府・太子		
		中曽司・八木・土橋	
	日下・国府・古市		
	日下	奈良市内	
	恩智		
	恩智（２）・河合・喜志・国府	中曽司	
四ツ池	河合		
	恩智・日下	鶯塚	
	瓜破（３）・喜志（２）・国府・高尾山		
	恩智（２）・日下・喜志・鷹の巣山	唐古・鴨都場・新沢一	北葛城郡二上山字田尻
	河合・喜志	中曽司	
	河合・喜志		
	喜志		
	高安山麓		
	恩智		
	喜志・日下・高尾山（鷹の巣山）		安閑陵・春日山皇女陵
	恩智・喜志（２）・国府	唐古	大阪城
		唐古・下明寺池	耳成村新賀池周辺
			徐福墓
	喜志		
			大場古墳（赤磐郡高月村字牟佐）
	喜志・瓜破		聖徳太子墓
	喜志	竹ノ内	長持山古墳
		中曽司	
	恩智・喜志・日下	唐古	
		新沢一	宣元天皇陵
	恩智・喜志・高尾山（鷹の巣山）		宇智川（ママ）磨崖碑
	瓜破・喜志		
	瓜破・恩智・喜志・国府・高井田	唐古	道明寺山古墳・聖徳太子墓
		新沢一・鴨都波	
四ツ池	喜志・日下		
			神護寺
			庵寺山古墳

表２　『考古小録』からたどる

日付			同行者	踏査先（財団法人辰馬考古資料館1988	
西暦／元号（昭和）				摂津	
				阪神間	北摂方面
1948	23	冬	単独		
			家族		
		春	単独		
			家族・子友人		
1950	25	冬	単独	加茂	
1951	26	冬	家族・子友人		
			家族		
1953	28	秋	同好	甲山裏・加茂・仁川	
1954	29	冬	子友人		
			同好		
		夏	同好・学生		
			同好		
1958	33	夏			
1961	35	冬			

凡例
その季節のうちに訪れた遺跡を表す（春：３-５月、夏６-８月、秋９-11月、冬12-２月）。
同じ日に訪れた遺跡と別日に訪れた遺跡が混在しているため。（　）内の数字で踏査回数を示す。
踏査の際に参拝・見学した社寺や博物館は省略した。
同行者は、単独、家族、同好（友人・関係者）、子友人（子供の学校・塾での友人）、学生（同行者が引率した中高生）に分けた。
同行者不明は単独扱いとしたが、近隣の遺跡の場合は家族が同行している可能性も残る。
日付不明記事は挟まれる記載の前の月で集計した。

『考古小録』以後の活動

記載の途切れがちになる年代以降の活動について、日誌的記載と異なる記録からもう少し検討してみる。具体的には次の２点を対象とする。

１：『私のコレクション　考古資料』（写真５・図５）

中表紙に「近畿地方における古代土器の表面に画かれた紋様拓本集　S296.29」との記載があり、遺跡別にまとめられた採集土器の拓本が56頁（片面）である。

２：『各所取得の布目瓦破片古瓦破片拓本集』（写真６・図６）

「S31.8.4　～　S58.1.20」の注記があり、瓦の拓本が25枚（片面・画仙紙貼付）である。

ともにB5版の紙を紐綴じでまとめている。結論から言えば、山田氏の関心がより専門的になっていったと捉えうる記録である。どちらも採集日をスタンプなどで記録しているが、２で確認できる最古の採集日は31年８月４日で、『考古小録』記載の繁昌廃寺の発掘調査見学時期に該当する。おそらくこの時期より瓦の採集が始まっており、それは寺院跡の発掘調査を実際に目にしたことがきっかけとなったと思われる。ただし瓦の採集資料は図化等に耐えるものは少なく、寺社参拝に際して拾ったものがほとんどとみられる。その代わり、梵字に関する学習記録が山田氏の遺した資料の中にあり、寺院に関しては関心の方向性が次第に定まっていたものと思われる。

一方で土器や瓦は石器類と異なり、資料そのものに採取日等の注記を積極的に行っており、戦後の活動記録としても復元可能である。そこで土器の注記から『考古小録』以降の採集活動の復元を試みる。『考古小録』に踏査の記載があり、採集資料に戦後の日付の注記がある遺跡は、唐古・喜志・仁川・加茂・大和川（瓜破）の５カ所である[7)]。先に述べたように山田氏は、加茂遺跡周辺の

山田氏の踏査先（続き）

『山田博雄氏収集資料目録』記載地）			その他
和泉	河内	大和	
	喜志		
		唐古	
			豊中の古墳
	喜志		源氏三代の墓・用明天皇陵、二上山
	喜志・国府・恩智		
		唐古・新沢一	宣化天皇陵
	喜志		二上山
		唐古	
			繁昌廃寺
			紀ノ川線沿線
	喜志		

環境変化から採集活動の継続の困難さを想定している。実際に採集資料からは上記５カ所（採集資料のない踏査先もあっただろうが)、唐古・加茂遺跡以外の遺跡は１～２回のみの踏査であり、記録には残っていないが、訪れたものの環境の変化に活動できないまま帰宅したこともあったのだろう。一方、加茂遺跡で採集した土器には「50.10」・「50.11」・「53.6.10」の注記があり、土器・石器を採集した遺跡としては晩年まで訪れていることになる。ただ50年の直前の日付が「34.1.2」であり、間が空いている点をどう考えるかがのこるが、資料の採集はなかったものの時折、現地を訪れていたと考えるか、50年前後に何か採訪するきっかけがあったかである。後者とするならば、加茂遺跡を取り上げている『川西市史』・『伊丹市史』の刊行時期である。特に後者は山田氏の採集資料が詳細に取り上げられており、編纂に関わった方々も山田氏のゆかりの深い方々である。編纂作業の情報を耳にして、再訪したと考える方が自然ではないだろうか。

以上のように、『考古小録』だけでない山田氏が遺した多くの資料が、当館設立までの氏の活動をつなげてくれている。戦後には日誌のような記録はないが表１に掲げた資料が遺されており、田岡氏たち多くの研究者からの教示を受け、考古学への関心はより専門的なものへと高まり、採集資料の整理も行っていた。この点は当館が資料を譲り受け、記録集を刊行する際にも非常に助けられている。

３『考古小録』からたどる加茂遺跡の踏査

山田氏が踏査した遺跡の中でも、加茂遺跡は最も多く訪れそして非常に多くの遺物を採集している。紹介してきたように詳細な記録はあるものの、論文等でその内容を公表していないため、最初

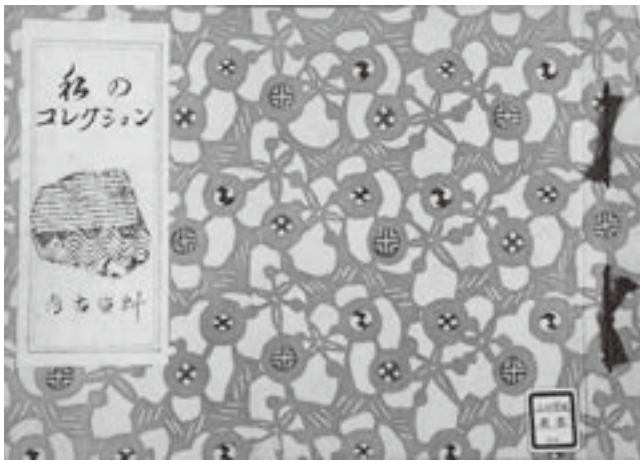


写真５　『私のコレクション』表紙

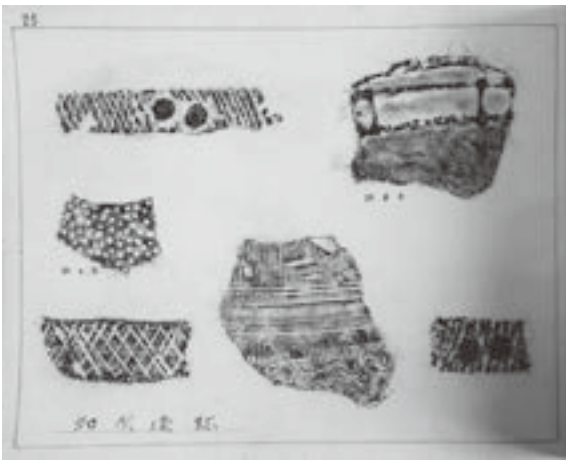


図５　同　加茂採集土器拓本

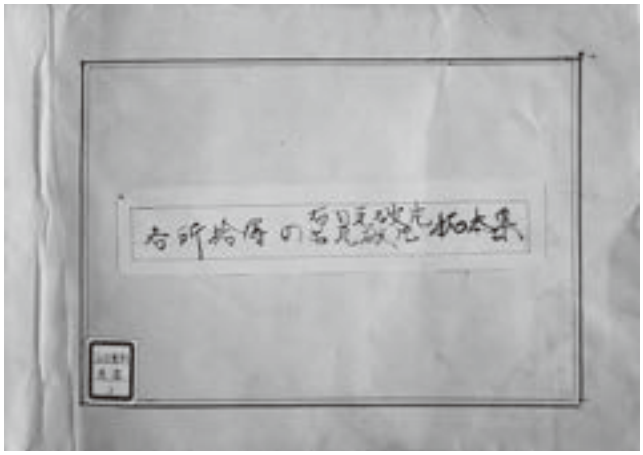


写真６　『各所取得の布目瓦破片古瓦破片拓本集』表紙

図６　同　繁昌廃寺瓦拓本

期の発掘調査にどの程度情報が及んでいたのかについては不明である。

そこで山田氏の活動記録を、加茂遺跡に限定して踏査場所を具体的にたどりながら、山田氏が加茂遺跡に関わる先行研究をどのように活用し、また踏査記録がその後の発掘調査と有意な関連を見いだせるのかを検討する。

採取地点の変化

表３は山田氏の加茂遺跡の踏査記録から、採取地点に関する記述のあるものだけを抜粋している。記載の基準として神社境内を原点に、その東西南北と立地を書いていることが多い[8)]。当初はあまり場所について記すことは少なかったが、次第に採取場所の記載が目立つようになる。採集地点の記載が具体的になるのは16年以降である。きっかけと推測される出来事が16年４月14日に記されている。同日には神社東側の桃畑が伐採されていること、土砂売買の話が進んでいることが記されている。採取場所の表記が増えるのはどうやらこの日がきっかけのようである。図３にあるように当初は目立つ資料のみ採集場所の詳細を記録する程度であった。この書き込みの増えた採取場所の記載をたどっていくと16年は神社西側が多く、「墓地南竹林」といった表記も登場する。おそらく上記土砂売買の噂を聞き、山田氏は踏査範囲の拡大・変更を意図したかと思われる。ただ、東側の桃

写真７　現在の栄根霊園付近

図７　18年２月11日管玉採取地の略図

図８　加茂採集土器

図９　恩智採集土器

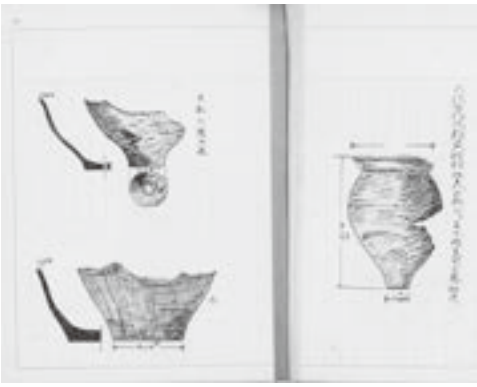


図10　大和川採集土器

畑で10月５日に銅鏃を発見し、その後状況の落ち着きを確認したのか、神社東側の記載も再び目にするようになるが、「東側北より」などといった表記になっており、位置的には以前より北側にシフトしているとみられる。18年２月11日には出雲石の管玉を発見したとの記載もあり（図７）、結果的に笠井氏が指摘していた玉類の散布域をこの時期に丹念に踏査していたことになるのだろう（笠井1916）。その場合、16年以前の神社東方の採取地は、後代に住宅が建てられる道路に面した付近であり、次第に北に範囲を広げていったのだろう。27年時の発掘調査における第１・第２調査地点（トレンチ）も当初の踏査範囲の中であったと思われる。

神社西側は、当初は畑と記されていたものが16年４月以降、桃林という表記も増えていく。17年12月には「西北桃林」、18年３月には「道法面」という表記があり、採集場所として立ち入りを許可してもらった地点を増やしていきながら、踏査地点を東側同様に北にシフトしていったのかもしれない。27年時調査の段階で、地図の上では果樹園となっていた地点とその近隣で行われた発掘調査との対応を探ると、15次・46次・49次・171次の調査が該当する。接合関係等の検証はさすがに

表３　山田氏の

日付				同行	採取場所の記載
1939	14	4	19	単独	
		4	23	同好	
		6	29	単独	桃林道路上（石包丁） 住宅地北側道路上（石匙）
		8	13	単独	
		11	12	単独	
1940	15	1	11	家族	
		6	7	単独	西の畑
		6	18	単独	西の畑
		6	23	家族	
		7	2	単独	東側道路上
		9	8	単独	東側北（？）桃畑
1941	16	4	7	単独	西方の桃畑（石包丁）
		4	14	単独	
		4	28	単独	西方の桃畑　牧場のある北の畑 真西畑　帰路墓地南竹林路辺
		6	18	単独	西方の桃畑
		10	5	単独	東方の桃畑（銅鏃）
1942	17	1	16	単独	北側
		2	11	家族	西方の畑（石槍）・桃林（石包丁）
		3	22	家族	西側桃畑　東側桃畑
		8	16	家族	東側の桃畑（石斧）
		11	3	単独	西北の桃畑
		12	23-25	家族	西側桃畑　東側桃畑
1943	18	2	11	単独	東北の桃畑
		3	21	家族	西方の道法面（石斧）　東方畑
		9	12	家族	東方の桃畑
		11	3	家族	東方北よりの桃林（石包丁）
1944	19	1	2	家族	東側桃畑
		6	11	家族	西側畑（石斧片）
1950	25	1	7	単独	
1953	28	11	3	同好	西の畑　東の桃畑

困難であるが、山田氏が踏査に及んだ可能性の高い地点である点は指摘しておきたい。

採集資料の変化

加茂遺跡において土器の採集情報は『考古小録』にはあまり記載されていない。土器に記された注記からは記載されていない日付も確認できている[9)]。また採集点数も他の踏査先と比べると少ない方であり、破片じたいも小さいものが多い。あくまで採集目的は石器であったと思われる。

土器に関する注目すべき記載が、15年９月８日にあり、同日採集の土器について恩智遺跡で採集したものと同じ文様であることを指摘している（図８・９）。続く９月10日には新聞記事で情報を得ていた大和川（瓜破）を初めて訪れ、短期間で３回続けて踏査を行っている（図10）。また現地で同好の方との知遇を得ている。遺跡が周知となった原因から想定できるように、この地で採集した土器片は山田氏の採集資料の中でも大きいものが大半で、場所によって主目的とする資料の種類を変えていることは想像に難くない。加茂遺跡で山田氏が数多く土器を収集、その内容を記載するのは16年４月８日で８点である[10)]。またこの時期は採集者の名前も『考古小録』に細かく記載する

加茂遺跡踏査記録

備考
「散乱する無数のサヌカイト」
宮川石器館見学
昨日の豪雨の影響
石鏃採集過去最多。
土器片４／７「恩智採取品と同紋様」
神社東側の桃畑移植。土砂売却の話を聞く「完全な土器の出土は覚束ないだろう」
「竹林内にて採取せし石器のありし付近は今後精査する必要がある」 「南方桃畑より約30尺下方にあり桃畑開墾の際相当大なる石器を●●●して下方に投棄されて居るだろう」
土器の概要記載
雑草刈り取りの際の道路に投棄された石の中に石斧
地図（出雲石管玉）
周囲の環境変化「今後石器の発見は困難であると思う」
川西池田駅の改名

ようになっている。

以上の点から踏査地点の変化、他遺跡への踏査で得られた知見、同行者としての子ども、これらの動向を一連の動きとして捉えることができると考える。まとめると当初はその当時の加茂遺跡に対する理解（笠井　1915・1916など）にそって石器の採集を中心に活動していたが、子どもが土器・土製品を採集することで、他遺跡採集品と文様の共通する資料に気付き、土器の文様についても関心を深めていったのだろう。大和川での採集も含めて弥生時代の土器の年代観についても押さえているようで、その整理の成果は先に触れた『私のコレクション　考古資料』にも表れている。

4　おわりに

以上のように、山田氏の活動をその記録『考古小録』から復元し、とくに後半は加茂遺跡の踏査に絞って検討してきた。浮かび上がってきたものは単なる個人の踏査記録ではなく、考古学の歩みとも関連した活動（遺物採集・好事家同士の資料交換といった古き時代の活動から、採集地点・日付の記録や採拓といった現代でも通じる愛好者の行動）の変化であり、このような変化は戦後の復

興の中で、考古学そして埋蔵文化財行政の歩みとも関わり合いながら動いてきたとみられる。とりわけ西宮史談会、戦後の西宮文化協会を通じ、田岡香逸氏、当館初代館長である高井悌三郎氏と行動を共にすることが多かったことが、山田氏がその変化にも問題なく対応できたこと、採集した資料が有する情報が失われることなく、現在に伝えられたことの理由になるだろう。山田氏が遺した加茂遺跡に関する踏査記録・採集資料は、その重要な分岐点となる時期の一端をしっかりと示してくれている。

注

1）スタンプは縦書き仕様である。ただ大学ノートの縦書き・横書きの体裁は統一されておらず（No.3まで縦書き、以降横書き）、横書きの場合、手書きで日付を記載する場合もある。

2）昭和15年２月28日に記載がある。

3）後述する資料への注記が元号で行われているため、以後の年数表記は元号にそろえる。

4）踏査の事前準備としてか、16年５月には京大報告から木戸川・恩智に関する記載を抜粋している。文献等含めた情報の教示を得ていると思われる。

5）子どもとその友人だけで越水を訪れたこと、土錘を採集していることを記している（16年10月26日記載）。

6）昭和17年４月18日には空襲警報があった旨の記載が、19年３月17日には自宅周囲に防空壕を掘るといった記載がみられる。

7）田能遺跡などは戦後のみの踏査であった。また唐古遺跡は加茂遺跡と並んで戦後踏査回数の多い遺跡であるが、訪れた時期がほぼ12月～２月に限られる（11月が１度だけある）。採集地点が唐古池を基準とした記載をしており、踏査に際して池の水抜き等の情報を踏まえていたと思われる。表２を季節ごととした大きな理由でもある。

8）神社が説明として記載されない採取地には「住宅地北側の道路上」「墓地南の竹林内路辺」がある。前者については、のちに刊行される発掘報告書などに記載される周辺の立地・環境の記載から、神社境内東側の住宅地を指していると思われる。後者は、加茂遺跡から現JR川西池田駅へ帰り道に竹林の隣接する墓地があり、この神社北側の墓地付近を指していると思われる（写真10）。

9）確認できる範囲で『考古小録』記録していた期間で、昭和13年10月５日、14年２月11日、18年８月、19年５月10日がある。後ろ２日については、前日もしくはその前後に記載があることから省略されたものとみられるが、時期の早い２日について記録はない。先に述べた記載方法の定まる前であったためと思われる。

10）『考古小録』の記載は４月７日のみであり、翌日は大阪空港へ出掛けたとの記載になっている。日付の記載ミスか、大阪空港踏査の前後に加茂遺跡に訪れているかが考えられる。

写真・図出典

『考古小録』（写真１、図１～４、７～10）、『私のコレクション』（写真５、図５）、『各所取得の布目瓦破片古瓦破片拓本集』（写真６、図６）、加茂採集資料（写真２～４）、写真はすべて青木撮影

参考文献

伊丹市史編纂専門委員会（佐原眞・横田義章・高井悌三郎）1968「伊丹の遺跡と遺物」『伊丹市史』第４巻（史料編Ⅰ） 7-85頁

伊丹市史編纂専門委員会（佐原眞・高井悌三郎）1971「考古学からみた伊丹地方」『伊丹市史』第１巻　71-198頁

岡野慶隆2006『加茂遺跡　大型建物をもつ畿内の弥生大集落』日本の遺跡8　同成社

笠井新也1915「玉類・齋瓮及び彌生式土器を混出する石器時代の遺蹟（1）（2）」『人類學雑誌』第30巻第11・12号　408-417、459-465頁

笠井新也1916「玉類・齋瓮及び彌生式土器を混出する石器時代の遺蹟（3）（4）」『人類學雑誌』第31巻第１・２号

22-25、59-65頁
川西市遺跡調査会・川西市教育委員会2009『川西市加茂遺跡―市道化に伴う発掘調査報告―』
川西市教育委員会1982『川西市加茂遺跡　市道11号線建設にともなう発掘調査報告』
川西市教育委員会1994『川西市加茂遺跡―第117・125次発掘調査概要―』
川西市史編集専門委員会（武藤誠）1974「考古学からみた川西地方」『かわにし』川西市史第１巻　39-168頁
関西大学博物館2023『摂津加茂遺跡発掘70年展』2023年度関西大学博物館春季企画展
合田茂伸2020「紅野芳雄著「考古小録」にみる考古資料収集家」『なにわ大阪と本山彦一―大正期大阪への貢献と本山考古室―』2018年度・2019年度関西大学創立130周年記念特別研究費（なにわ大阪研究）研究成果報告書　関西大学なにわ大阪研究センター　129-137頁
財団法人辰馬考古資料館1987『山田博雄収集資料目録』
末永雅雄ほか1968『摂津加茂』関西大学文学部考古学研究第三冊
田岡香逸1985「甲陽史学会の夢」『甲陽史学会 田岡香逸先生高井悌三郎先生宮川秀一先生 著作目録』甲陽史学会記念事業会　103-122頁
直良信夫1943「摂津加茂発見の銅鏃」『近畿古代文化叢考』 14-22頁　葦牙書房
宮本常一1967「私の学んだ人―田岡香逸」『武蔵野美術』63（『甲陽史学会 田岡香逸先生高井悌三郎先生宮川秀一先生 著作目録』甲陽史学会記念事業会　1985年再録　123-132頁）